

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：35411

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00337

研究課題名（和文）清朝康乾年間における、地方文献編纂と詩会活動を背景とした杭州詩人達の葛藤と文学

研究課題名（英文）The concerns of Hangzhou poets and their literature in the context of the compilation of regional documents and poetry meetings during the Kang-Qian period of the Qing Dynasty

研究代表者

市瀬 信子（Ichinose, NOBUKO）

福山平成大学・経営学部・教授

研究者番号：50176294

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：清代康乾年間に、揚州を中心とする詩会で活躍した杭州詩人とその作品の地方文献への貢献、詩人の評価について調査し、正当な評価を受けなかった杭州詩人の矛盾について考察した。当時の地方志には当地を詠ずる詩が多く、詩会の詩も多い。清代地方志は当代の作を収録する傾向を強め、各所を詩題として分詠する詩会は、採録の場として有効だった。詩は史料を補うという表現が見られるのも、詩と地方文献との関わりを示す。杭州詩人は、地方志に詩を提供したが、流寓の存在であり、詩人としての記録が少なく、また個人の個性を發揮する詩を評価される機会を失った。袁枚の浙派に対する批判は、記録のために消費された詩人のあり方への反発といえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

清代は地域文化の時代であるという指摘はこれまでもあったが、地方誌、詩会、詩集を関連させ、詩会という視点で全てを捉えるという研究は全く無かった。しかし、清代の詩会が他の時代と異なる点は、ここにある。そのことを明らかにするのが本研究の目的である。研究方法として、詩会の詩人を取りあげ、作品の記録のされ方、詩人の記録の残され方から彼らの境遇に迫り、そこから清代詩会の実態に迫ろうというのは本研究独自のものである。また袁枚を杭州という視点から捉えるというのも、袁枚研究の新しい視点である。

研究成果の概要（英文）：This study surveyed Hangzhou poets active in Yangzhou during the Kang-Qian period of the Qing Dynasty, analyzed the contributions of their works to regional documents, and critically assessed the reputations of these poets. Many poems in local records, and numerous poems were also composed in the Hangzhou poets. Local records began to include increasing numbers of works from the Qing period over time, and poetry with various local sites as the theme were composed at poetry meetings. In this way, these meetings served as an effective venue for maintaining poetry records. The survey shows the relationships between the poems and regional literature and found that the poems supplemented historical materials. Nevertheless, although the Hangzhou poets submitted poems to local records, because Hangzhou poets traveled from place to place, there are few records of the poets. For these reasons, these poems have not been evaluated as expressions of their authors as individuals.

研究分野：中国文学

キーワード：清朝 杭州 詩 乾隆

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

清朝における詩の研究は、長く詩論を中心に展開されてきた。近年、詩論を離れて地域によって清代詩をとらえようとする研究が盛んになってきた。それは、清朝政府が地方統治のため、『清一統志』編纂の名目で、地方誌編纂を推進したことと深い関係がある。明代に『明一統志』編纂に伴い、地方誌に詩が多く採録されるようになったことはすでに指摘されているが、清代は更にその傾向が強くなった。故に清代の地方誌は詩と切り離せないものとなっていった。詩と地方誌の関係については、別集に収録されない詩が地方誌に多く含まれるという報告が近年目立っているものの、そこから進んで、地方誌と詩との総合的な関係を考察する研究はまだ少ない。

清代は詩会が盛んであり、詩会の研究も盛んであるが、詩会のメンバーを明らかにすることに重点が置かれており、詩会のみを独立したものと扱う研究が多い。地方誌に収録される詩は、詩会での詩から採られたものが多いことが応募者のこれまでの研究で判明しているが、詩会と地方誌の関連についての研究は進んでいない。清代の詩会隆盛と地方志は関わりがあるのではないかと、というのがこの研究の重点の一つであった。一方、地方の詩会で活躍し、地方志にその詩を収録されている詩人達は、いかなる人々か、と見ると、後世に名を残す詩人も多いが、そうとはいえない詩人の詩も多く収録されている。更に、個人の別集に収録されない詩が、地方志には含まれている。つまり、地方志は清代の隠れた文学史を見せてくれる場といえる。しかし、その詩についても地方志に収録される詩人達についても研究は進んでいない。

国内の研究では、清詩集総集の研究である松村昂『清詩総集叙録』(汲古書院、2010)は、清詩の総集を全国と地方に分けて分析し、80種に及ぶ地域詩総集が収め、本研究が目指す地域と結ぶ詩人活動を知る上で、非常に参考となる。一方地方志研究として、大澤頭浩「詞章の学」から「輿地の学」へ：地理書に見える明末」(史林第76巻1号、1993)は、『大明一統志』を中心に地方誌と詩文の関わりについて論じ、地方志と詩の関連を知る上で欠かせない論考である。他に小田田章の杭州杭州地方志研究は、方志における杭州の特異性について論じ、杭州地方誌と詩会の詩を知る上で参考となる。

国外の研究では、張仲謀『清代文化と浙派詩』(清代詩文集彙編東方出版社、1997)は清代杭州詩について論じた基本的研究書である。蔣寅『清代文学論稿』(鳳凰出版社、2009)は清代文学と地域文化について論じており、本研究の発想の原点となっている。夏勇『清詩総集通論』(中国社会科学出版社、2016)、劉和文『清人選清詩總集研究』(安徽師範出版社、2016)は、地域詩総集についてのまとまった論考であり、それらを参考に、地域に取り込まれた詩人の調査を進めることができる。王兵「論清代清詩選本的分期及其特徵」(『中国文化研究所学報』第52期、2011)など一連の研究では杭州での詩の総集が地域詩総集の中で最大規模であることを指摘しており、杭州という地方の詩とその記録に対する特異性を指摘しており、本研究が杭州を研究する際の手がかりを得るものである。袁枚研究では杭州詩壇を視점에論じられた研究はなく、その欠落を本研究が補うこととなる。

### 2. 研究の目的

(1) 清代康熙乾隆期にかけて隆盛を迎えた地方誌の編纂事業、地方詩集の編纂事業、詩会の隆盛は、いずれも同じ時期に起こっている。清代は地域文化の時代であるという指摘はこれまでもあったが、地方誌、詩会、詩集を関連させ、詩会という視点で全てを捉えるという研究は無かった。しかし、清代の詩会が他の時代と異なる点は、ここにある。地方文献が大量に作られた時代の詩会と詩人の役割、地方文献の編纂が詩壇にもたらしたものを明らかにするのが本研究のひとつの目的である。具体的には杭州等外からの詩人を迎えることで、地方文献と詩会の隆盛を迎えた揚州を題材として、この実態を捉えてゆく。

(2) 地方詩集、地方志は全国で編まれたが、とりわけ杭州を始めとする浙江を中心に、盛んに行われてきた。また詩会もとくに江南において盛んであった。中でも江南の各地方都市の詩会で活躍したのが、杭州を中心とする浙江の詩人達である。地方詩会での活動が地方文献に記載されることで、地方に貢献することになった詩人達は、果たして詩人としての評価はどうであったのか。当時の詩評と後世の評価からそれらを明らかにすることで、地方文献の時代に貢献した詩人達の存在の意味と彼らの葛藤について明らかにし、清代詩史の埋もれた一面を明らかにするのがもう一つの目的である。

(3) 杭州詩人袁枚は、引退後南京に居を構えたため、杭州詩壇と切り離して捉えられてきた。しかし彼は杭州詩会隆盛の終盤に生まれ、詩会の詩人らと交流を持っていた。個人の情を詠ずるべきという性情説は、格調派への反発とのみ解釈されてきたが、詩会という場で、地域や金石を詠むことで詩壇の隆盛と讃えられた杭州詩派、いわゆる浙派への反発という視点で捉え直すことができるのではないかと考える。袁枚という杭州詩人のフィルターを通して、地方文献の時代と、そこで活動した詩人達が抱えた問題を明らかにするの、この研究の目的である。

### 3. 研究の方法

目的(1)の考察のために、地方文献と詩会の隆盛を迎えた揚州を題材として、詩会とその詩人達の活動実態を捉えてゆくための調査を実施した。まず、清代地方文献に記録される詩会の詩と詩会の詩人について調査するにあたり、康熙から嘉慶年間にかけての揚州地方志と地方詩総集に的を絞って、詩会と参加詩人の記録のされ方を調査した。清朝の『揚州府志』については、『康熙二十四年揚州府志』(広陵書社)、『雍正揚州府志』(広陵書社)、『嘉慶重修揚州府志』(広陵書社)

を対象とした。特に『嘉慶重修揚州府志』は、乾隆年間に活動した詩人達の記録が残された揚州府志として詳細に調査した。また、明末万暦年間の『万暦揚州府志』も比較の対象として調査を実施した。万暦年間は、詩文と地志の関係を見直そうとした時期であるため、比較することで清朝地方志の特異性を見るためである。なお、詩が収録されるのは、更に細分化された地域の地方志で有ることが多いため、郡県志の調査も行ったが、コロナ禍ということもあり、実際に調査を行えたものには限りがあった。

実施にあたり、清代地方志、地方文献に関するデータベースを購入し、それによって事前の調査を実施した。地方文献の他、『清代詩文彙編』(凱希メディアサービス)のデータベースの発売に伴い、清代の別集に関しても事前調査を実施することができた。本文の確認は、厲鶚『樊榭山房集』(上海古籍出版社ほか)、『清代詩文集彙編』(上海世紀出版公司、上海古籍出版社)所収の『孟晉齋詩集』などの杭州詩人の別集によって確認した。

その後、実際の各時代の揚州府志の原本を調査した。また地方詩総集に関しては、阮元『淮海英靈集』『広陵詩事』の影印本、排印本を調査、その中から関連事項を拾い上げていった。国内資料については人文科学研究所での実地調査の他、コロナ禍ともなって公開が相次いだデジタル資料を利用した。国外資料については、研究開始時は、海外での調査ができず、これもできる限り公開されたデジタル資料を用いて調査を実施した。またオンラインを利用して、中国、台湾の資料及び論文を蒐集した。

陳章、陳皋兄弟に関しては、天津と揚州の資料の資料を調査し、厲鶚については揚州の資料を中心に調査した。また、他地域ではあるが、杭州詩人周京が地方に求められた実績を参考とするために、周京が移動した際の記録の調査にも及んだ。揚州での詩人の活動を明らかにするものとしては、杭州詩人を求めた塩商の活動を見ておく必要もあったが、揚州塩商に関しては馬氏兄弟など、限られた塩商に関する資料の調査にとどまった。

目的(2)の考察のために、陳章という詩人に重点を置き、彼の作品とその評価についての調査を実施した。これは、無位無官の詩人が地方に流寓として滞在しながら、活動することが、詩人の作品にどのような影響を与え、またどのような評価を与えられたかを考察するためである。

まず、陳章には別集があり、友人らが寄せた序文などから、陳章の詩に対する当時の評価について調べた。また地方志に詩が多く収録されている、と言われているため、揚州での地方文献に収録されている詩がどのような内容かを調べた。また詩会の詩、地方志に掲載される詩の詩風と、地方志に掲載される詩の詩風が一致するものかどうかについて調査した。これは、陳章の作品が最も読まれた可能性が高いのが、詩会の詩であり、それが収録された地方志であった可能性が高く、身近な人々の評価と、多くの人の目に触れた詩会の詩集や地方文献に収録された作品との間に距たりがあるかどうかを調査し、地方志や詩会の詩が、詩人独自の作品と言えるものであったかどうかについて考察を試みた。

調査に当たっては、データベースを利用して効率化をはかり、必要な文献については複写で取り寄せて資料を揃えた。またデジタルアーカイブなどの公開が増加したため、そちらも利用して、なかなか自由に海外との移動ができない中、なんとか調査を進めることができた。

目的(3)については、袁枚の『小倉山房詩文集』(江蘇古籍出版社『袁枚全集』)及び袁枚の他の著作の中で、厲鶚に触れている部分を抽出し、それをもとに考察を進めた。厲鶚の評価については、同時代の詩評とも比較するため、沈徳潜『國朝別裁集』などと袁枚の詩評を比較し、当時の評価と袁枚の評価のずれについて調査した。厲鶚については『樊榭山房集』(上海古籍出版社)ほか、地方志に収録された詩及び代表作の一つとされる『南宋雜事詩』の詩風について比較の対象とした。また袁枚が厲鶚を浙派の領袖としてみており、浙派への批判も述べていることから、浙派の何を批判対象としたのかを、詩評の中から整理し、調査した。その中で、歴史書や地方志を補うための詩作に力を入れる風潮が当時の詩壇にあったこと、それが袁枚の主張する個人の性情とは異なる方向の詩となっていたことを明らかにした。

これらの調査に関しては、揚州地方志他、清代詩集に見える浙派に関する記載を、データベースで調査した上で、臺灣國家圖書館蔵書にて文献調査を実施した。更にデジタル資料を用いて調査を実施している。

#### 4. 研究成果

まず、清代前半期、杭州詩人が移動した先として揚州での記録を調査し、彼らの活動と意義について考察した。杭州詩人であり、無位無官のまま揚州で活躍した詩人のうち、対象としたのは厲鶚と陳章である。金農などの芸術家も詩壇で活動しているが、揚州八怪とされるように、芸術方面での活躍が目立つため、厲鶚と陳章に絞り、芸術家ではない杭州人が、揚州でどのように活動したのかを調べた。

厲鶚、陳章が揚州に移動した理由については、両者とも貧困が理由であると記している。両者とも科挙による仕官の道を外れ、常に貧困と共にあった。その様子は、陳章の弟陳皋が天津の水西荘に寄寓したとき、杭世駿が「貧しくして家食する能はず、遠く津門に走る」(「吾尽吾意齋詩序」)と記すとおりで、当時揚州、天津に移動した人々については、おおむね似たような記録が残されている。詩人の事情として貧困があったとしても、陳章ら杭州詩人は、各地で広く「求められた」という記録がある(杭世駿「吾尽吾意齋詩序」)。揚州以外の地でも、杭州詩人を待ち受ける人々がいたという記録は散見する。では何を求められたのか。それについて直接記しているものはない。しかし、地方都市に移動した後の彼らの活動の実態からその理由を推察することができる。

厲鶚は馬氏のもとで書物の校訂に携わり、また蔵書を元に、『宋詩紀事』をはじめとする様々な記録の編纂に着手している。『宋詩紀事』編纂には、馬氏兄弟の他、陳章も関わっている。更に、全祖望も翰林院の書籍をもとに資料を提供し、辞職後は揚州でも書籍の校訂や編纂に携わる。書物の編纂で名が知られるのは厲鶚であるが、名が表に出なくとも、陳章もそうした作業に多く力を貸していた。杭州詩会の名を挙げたのは、厲鶚も携わった「南宋雜事詩」である。歴史を踏まえ、詳細な注釈を付したこの作品は、詩自体の作品性よりも、史実を補う資料としての価値を高く評価された。参加者は杭州趙氏の蔵書を元に作業を行っている。杭州詩壇の活動は、盛んな詩会活動とともに、詩会の詩が史実や地域の記録を補うものであることであった。揚州蔵書家達がこぞって杭州知識人を求めた一因はここにあるといえる。実際、厲鶚、陳章ともに、揚州で地方志の編纂にも携わっている。

更にもうひとつの理由は詩会での活動である。揚州詩会の詩をまとめた『韓江雅集』の中には、揚州の名所を分詠するものが多い。そこに寄せられた全祖望の文には「志乗」つまり史料を補うことを目指すことが記されている。詩会の詩は、当地を詠じ、記録に残す役割を果たした。それらの詩は、地方志の名所を記した箇所に掲載される。清代の地方志は、詩文の収録が多いことをその特徴とする。明代にもその傾向があったが、清代には更に詩が多く掲載されるようになったのは、皇帝の詩の愛好がある。南巡したことを称えて『杭州府志』が編纂されたとされるように、皇帝の南巡の記録を、江南の地方志は多くとどめ、更に皇帝の詩を収録するのが通例であった。それに続いて他の詩も収録されているのである。また、清代地方志は清代創建の庭園や建築物を古蹟として収録しており、同時代人の詩を収録するのだが、別集から拾うのは難しく、地域の名所を題材に分詠することが多かった地方詩会の詩は、地方志に必要な詩を提供してくれる場であった。しかし揚州は、王漁洋以来、外部から来た官僚などが開く詩会は有名であったが、地元の人詩人は限られていた。そこで詩会に長け、地方志に掲載できる詩を作ることができる詩人を呼ぶことが、詩壇のステータスとなった。

杭州詩人詩を提供は、単に地方に詩を提供しただけではない。当時の詩会は詩の訓練の場でもあり、天津の査学礼は、詩会によって、詩作が多くなったと述べており（「沽上題襟集序」）、揚州詩人たちも詩人として作品を多く残すことになった。阮元が『淮海英靈集』を編纂するにあたり、厲鶚、陳章ら流寓の詩人を一切含めず、地域の詩人のみに限っているのも、地域詩の担い手は当地の人間であるべきという考えがある。厲鶚、陳章らは、塩商の蔵書の価値を上げ、また詩会で地域や金石を詠ずることで、それらを地域の記録に残す役割を果たした。

しかし、阮元『淮海英靈集』に見るように、地域の詩集の中では存在が薄く、彼らの当時の活躍に比して、詩人としての評価が曖昧なものとなっている。こうした杭州詩人のかかえた矛盾を指摘した。この研究成果は、「清代揚州地方文献にみる杭州詩人の活動」（福山平成大学経営学部紀要『経営研究』第18号 2022）にまとめた。

更に、杭州詩人陳章に焦点をあて、その活動と作品及び作品に対する評価について研究を進めた。陳章は科挙に参加せず、生活が困窮するなかで、弟とともに天津・揚州に居を移し、パトロンのもとで詩作活動を行った。先に調査したように、陳章は揚州で塩商の蔵書の校訂作業などに参加し、地方志編纂にも携わるなど、詩人としてだけでなく、文献に対する知識を買われていたことが明らかになっている。陳章の詩は、『孟晋齋詩集』に収録されるが、彼の詩が読まれたのは、多くは詩会の詩集であり、地方志をはじめとする地方文献の中であった。つまり、個人の心情を詠う詩は多くの人の目に触れずに終わることとなった可能性が高い。詩集に序を寄せた全祖望の評価は、その「古心篤行」たる人間性の反映として、孤独と貧困の中でも、美しい音、言葉、を用い、品格のある詩と賞されている。しかし、揚州の唱和集である『韓江雅集』や揚州地方誌などに収録される詩は、その特徴を備えているとは言いがたい。こうした多くの人の目に触れる詩において作られたのは、決まったテーマ、とくに金石や名蹟を分詠するものであり、詩人の人格を求めるようなものではなかったため、地方志で陳章の伝がある場合も、唱酬に秀でたことをのみ記されることが多い。唯一死後に刊行された詩集には、友人の評価に値する詩が見えるが、実際に多くの人に認識された陳章は、職業詩人として地方誌などに作品が載るローカルな詩人といえ留まってしまったのである。これらの調査と考察を通じ、詩会の詩人が、名を上げるたびに、本来の詩人らしさが隠されていってしまったという状況が、一時期地方詩会で活躍した杭州詩人たちにあったことを明らかにした。この結果は、「詩人陳章の活動とその評価」（『経営研究』第19号 2023）にまとめた。

また、詩会という点で、清代の「集選詩」という詩体が、宮中あるいは地方の詩会で用いられ、盛んになった状況について考察した。その中で、江浙地域の詩会の中で、文選の句を集めた集選詩を含む集句詩が作られていたが、多くは高い評価を受けず作品が残らなかったことを明らかにした。これは陳章と同時代のことで、地方詩会隆盛の時、知識や形を重視し、詩人本人を映さない詩作が行われていたという背景を明らかにした。その成果は「清代『集選詩』に見る文選の受容」（『中國中世文學研究』第76号 2023）にまとめた。

最後に、康熙から研究年間にかけて活躍し、杭州詩人の代表者とみなされた厲鶚の詩作に対して、同じ杭州詩人の袁枚がどのように評価したかを考察した。さらに袁枚の批評を通して、厲鶚をはじめとする各地の詩壇で活躍した杭州詩人たちが抱えざるを得なかった問題点について考察した。

厲鶚は杭州を代表する詩人とされ、当時厲鶚に続く同郷の詩人達も含めて、袁枚から「浙派」と称された。浙派は、当時から宋詩偏重と典故の多様を批判されることが多かったが、厲鶚だけ

は別格で、豊かな詩才と典故を用いた知的で個性的な詩風は、高い評価を得ていた。袁枚は、自分自身が浙人であることを強調しつつ、浙派を憎む、と記している。そして厲鶚に対しては、詩才を称えつつも、批判を加える。批判の内容は、揚州塩商の蔵書の知識に基づく典故の多様であり、また詩型については、七言古詩を「索索然寡真氣」と、味わいがないものと指摘する。そこで、とくに七言古詩を中心に考察を行った。その結果、厲鶚の七言古詩には、同題集詠の作、つまり歴代の詩人と同じ題材を詠ずる、あるいは詩会同人とともに同じテーマで詠む詩が多いことがわかった。そのテーマには、揚州の古蹟、絵画、骨董、金石などが多く含まれる。また、杭州での作と比較し、揚州での作は、依頼されて絵画に題したものの、骨董を詠じたものが特に多いことが明らかになった。絵画や骨董を詠じたものは、その歴史についての典故が多く、詩としての情緒が乏しいが、その典故の多さゆえ、史実や考証を好む時代には大いに受け入れられた。更に地方志の中に収録するにも、史実に基づく詩は適切な素材であったといえる。実際、これらの作品のいくつかは、金石志、地方志などに採録されていることが確認できた。つまり、地方志など記録に採録されるにふさわしい詩として、その持ち主である塩商らに依頼され、資料的価値を備えた詩を作ったことが考えられる。袁枚は、厲鶚の詩について「幽懷妙筆」(「倣元遺山論詩遺山」)、「近体清妙」(「答沈大宗伯論詩書」)と賞賛するものの、揚州での作については、揚州塩商の蔵書からの知識に頼り、「寡真氣」(「答沈大宗伯論詩書」)と批判する。本来才能がある詩人が、揚州で塩商や地域文献に貢献する詩を作り続ける中で、その本質を失っていったことに対し、袁枚は同じ杭州詩人として強い反発を覚えていることが明らかになった。

ただ、袁枚は杭州詩人が詩会を以て広く詩壇の隆盛を招いたことに対しては、むしろ誇りに感じていたと思われる。よって袁枚は自ら詩会を開くことも多かった。しかし、地方志に貢献するような、注釈が多く、史料を補うがごとき詩には手を出さなかった。これは厲鶚の詩がゆがめられたと感じた袁枚の新たな道だったといえる。この研究の成果は、「」(福山平成大学経営学部紀要『経営研究』第20号 2024)にまとめた。

以上の研究を通し、揚州などの地方詩壇に移って活躍した杭州詩人達は、当時の活躍にもかかわらず、詩人として後世に評価されることがないという矛盾の中に置かれたことを明らかにした。またそのことに対し、詩人自身がはっきりとは不満は述べていないものの、後輩にあたる同郷の袁枚は、そうした詩人のあり方に疑問をいだき、一時代の隆盛を歌われた杭州詩壇から一歩離れたところに身を置こうとしたことがわかる。

今後はこの袁枚の考えが、彼の詩論に影響を与えていないかを検証してゆくこととなる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 市瀬信子	4. 巻 19
2. 論文標題 詩人陳章の活動とその評価	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 経営研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市瀬信子	4. 巻 18
2. 論文標題 清代揚州地方文献にみる杭州詩人の活動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 経営研究	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市瀬信子	4. 巻 76
2. 論文標題 清代「集選詩」に見える『文選』の受容	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中國中世文學研究	6. 最初と最後の頁 199-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市瀬信子	4. 巻 20
2. 論文標題 袁枚の厲鶚評価 - 地域を視点として -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 経営研究	6. 最初と最後の頁 11-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------